

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十四年三月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十八巻十一号（通巻第二二五号）

鈴



ぐるっけ

山口誓子先生追悼号  
第215号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2012

傘  
寿

品川 鈴子

八十年の白息おきやん悪ん坊ら

底冷にともがら傘寿鈴祓

悴みて忘れぬ飢ゑと兵ごつこ

感知灯点く追儼豆三つぶ飛び



吾は帽雛は烏帽子失へり

烏帽子失せ雛は額測られる

烏帽子失き親王雛は兄のごと

親王雛烏帽子失ひ胡坐かく

ささやかな寄付せし郷は雪隠れ

「こんばんは」と亡き夫に遇ふ牡丹雪



# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 中尾廣美

廃屋に形良き大樹紅葉す  
襦袢着て見る月蝕は天心に  
月蝕に愈よ輝く冬星座  
這いずりて秋草を刈る義父のごと  
この年も帰郷の如く鳴来たり

大阪 中島霞

山茶花の籬に沿うて正門へ  
山茶花の籬を低く尼僧住む  
日当りて祖師堂しんと桜の芽  
庫裡裏に箱庭ほどの冬菜畑  
きつぱりと濁世を隔て白障子

大阪 中田寿子

時雨受け赤鮮やかにくくり猿  
風に耐え下仁田葱やいよ太し  
五百円硬貨の預金十二月  
黒セーター代り番こに夫と着て  
余白にも書き込む手帖年つまる

大阪 野口喜久子

白息の弾み募金の声揃ふ  
枯葉飛ぶ宙にくるりと新体操  
湯豆腐に下戸も一献輪となりて  
冬星座光るひとつは夫ならむ  
待ち合はせ女もしたる懐手

兵庫 蓮尾みどり

子が覗き猫もときどき障子穴  
鷓鴣ちちちちと忙しなし  
難聴の丹田直に虎落笛  
腰入れて冬至南瓜に刃を立てり  
病むことは生きいる証春支度

兵庫 長谷川鮎

啓蟄に深みにはまるクイズ解け  
春風の匂う房総花畑  
光太郎智恵子出会いし浜ミモザ  
付櫓連子窓には春障子  
虫喰いの城の柱に春日差し

兵庫 林 哲夫

立ちばなし葱の匂ひし作業服  
薄塩の白菜さくさく歯愛しむ  
大ぶりの白菜どんと鍋奉行  
餅の音メ切迫る紀行文  
日向ぼこ遠く近くに妻の唄

兵庫 林 美智

皺の顔笑ひころげて忘年会  
句会果て夕餉はひとり湯豆腐で  
一人減り二人不参加年会  
挫けずに漬けてみようか白菜を  
舊友と膳かこむ幸去年今年

愛媛 福島 松子

浮島の隅に水鳥丸くなる  
木の葉降る音に耳立て散歩犬  
七五三神社石段清められ  
野良の猫集めし日溜り冬うらら  
簪も拒み大泣き七五三祝

愛媛 福田かよ子

榎櫃の実枝に吊られし忘れ杖  
木守柿二十も残し熟れに熟れ  
ログハウス薪軒を越す冬用意  
死すことも予定に入れてぬくめ酒  
風花のふわりふわりと犬の家

兵庫 藤井久仁子

朝ぼらけ紅ひとはけの雪の嶺  
尾根の小屋潰れむばかり蒲団干す  
日吉神社の茶屋に舌焼くおでん鍋  
噓して聞こゆ近さに隣家建つ  
落日に冬木くろぐる威を見たり

兵庫 藤田かもめ

札納卯年ゆかりの文珠院  
玄室に願かけ不動冬灯  
蛸焼めく皆既月食眠る山  
鰯起し氷見の漁港の百重波  
仲麻呂の望郷歌碑や春を待つ

兵庫 史あかり

天井画の龍躍り出る冬日和  
冥土への通ひ路の井戸冬ざるる  
地獄絵を見てよりマフラー巻き直す  
枯尾花互ひの腕を杖がはり  
冬眠の生き物はみな丸まりて

兵庫 古井公代

山峡の墓石冬日に乱反射  
トロツコの四万十めぐり咳激し  
大根抜く畑にポンプの水温し  
冬うらゝ幼の按摩心地よく  
吊し柿残り僅かな峡の家

大阪 古林田鶴子

渋柿のことさら赤きかくれ徑  
散紅葉おしげなく踏む車椅子  
幼な木も黄葉迎ふ新興地  
初しぐれ予約時間を気にしつゝ  
「行き止り」の標現はる枯尾花

香川 細川知子

冬もみぢ漢吊橋かつぼせり  
吊橋を渡るマフラー巻き直し  
木の葉髪淋しき時も笑ひをり  
蔦枯れて蔓は乱脈きはめをり  
夢殿の厨子の扉に冬日差

兵庫 細野恵久

鳥翔ちて芽立ちの枝の揺れ残る  
ぶらんこの少し振るる戻りぎは  
たんぼぼや並んで座る眼鏡の子  
残雪の山の名訊かずにはをれず  
あたたかき餌の餌飼ふ養魚場

愛媛 松井洋子

髪置の鈴鳴る草履も脱ぎて泣く  
千歳飴どの児も草履苦手らし  
着付けられ笑ふ兒泣く児七五三祝  
社殿内絵本準備し七五三  
水草紅葉濠のみ残す城の跡

埼玉 松本清川

冬日吸ふ子の権現の小草鞋  
稽古終へどつぷり浸る冬至風呂  
仙石原 吾も芒の波となる  
食卓に冬日差し込む朝餉かな  
年賀書くせめて宛名は毛筆でと

愛媛 松本恒子

喪の中に曾孫産まるる神の留守  
振り返り気づく幸せ実千両  
雑踏の中の孤独や年用意  
同齡の盆梅吾れと生きくらべ  
枯芒自然と出来し人の道

愛媛 三浦澄江

極月の暦一枚重しと想ふ  
めぐまれし余生と思ふ木守柿  
晩年や一すじの道石路の花  
花野行く生徒の殿大男  
つくす人亡き哀しみや霧笛鳴る

兵庫 三枝邦光

千年の堂塔守るや落葉焚  
短日や日おもて残る東山  
着流しの西郷どんに虎落笛  
雑炊にかくし技あり鍋奉行  
冬紅葉ひとえだ触るる投句箱

兵庫 水野 範子

落葉掃く白衣の小僧項傷  
寒に母亡くしあの子は何所で泣く  
冬の蜂叩く手を止め坂下る  
寒き日に門扉に掛かるチョコレート  
飼主のマナーに愕く寒芒

兵庫 水野 弘

犬あやし犬に咬まれる年の暮  
ルミナリエ吹き飛ばされし冬の月  
天龍寺黄葉影落つ紅き門  
枯落葉永久の眠りのはらからに  
尾鱸切り競りに飛ばさる凍鮪

香川 三橋 早苗

産み終へる前に事故死の枯蠹螂  
釜鳴りの止みて炬開き終はりける  
将校も照葉見しはず偕行社  
秋灯下オセロ最後反転す  
零余子飯炊けたところに出会せり

茨城 三輪 慶子

綿虫は来世の私飛び迷ひ  
口伝てふ師匠の小声竜の玉  
冬木立白くつきりとカフエテラス  
筑波より極月の富士大落暉  
数へ日や造り酒屋に長居して

埼玉 向江 醇子

ゴム櫛八十の師の心意気  
凍雲や商店街の裏通  
孫にやり子に貫ひたるお年玉  
大寒や出勤の子の武装して  
似たような家に冬陽の平等に

兵庫 村田 とくみ

毬栗をかみし庭下駄甲斐の宿  
利酒も梨の新種も次次と  
柿熟るる庭を囲ひて売地札  
ヘルメットかぶり父と子栗の山  
ちちる虫マンション五階の何処からか

佐賀 森山 子月

陽だまりに命信じて春を待つ  
ひざかけのぬくみ愛犬想ひ出す  
「母の日」の袋残さる冬日向  
横綱の笑顔满面年暮るる  
座ぶとんのまんだら模様冬知らず

大阪 師岡 洋子

校庭に土俵の名残木の葉降る  
小春日の少し出てゐる猫の舌  
夕時雨寺の置き傘うす埃  
着ぶくれて寺のスリッパよく滑る  
誰も見ぬテレビがついて日短し

# 鈴の奏

品川鈴子選

職辞してよりの勤労感謝の日 兵庫 中村 紘

近松の長き戒名小六月

坂下る桜紅葉の先は海

乱筆のままに終りぬ古日記

冬の朝ケトルの笛は楽のごと 東京 遠藤とも子

天に伸び川に伸びたる秋の塔

だれも皆若し秋夜の小津映画

とび出せば月はや皆既あかぐろく

金挾持ちちて翁の落葉搔き 兵庫 吉本 淳

送風機片手に漢落葉搔き

暮の街ここを先途とチンドン屋

賀状書く年の重みを身に受けて

首塚の少し傾く冬の雲 兵庫 高木 篤子

残る歯のひとつ欠けたり冬の賜

冬晴れの雪見御所跡欠け瓦

清盛の福原遷都梅かたし

杜鵑草血の斑濁きてほると落つ 香川 吉井 潤

白菜も犬も乗り合う小型船

冬帽子座席に投げてバックギア―

セーターの腕をまくって海をませ

猫舌の友集まりておでん鍋 香川 石川 裕美

湯冷めして手先足先血の気なし

舌切れてまだ舐め続け千歳飴

冬日和やたら呑気に歩く猫

室の花隠れて会ひし喫茶店 兵庫 上田 雪夫

マフラーの巻き方孫の叱り方

安売りのカップラーメン阪神忌

大根引く腰の入れ方児に伝授

長けし子の咳が気になる隣部屋 兵庫 武山 貞子

明日は早や乙子月なり赤の飯

返答なきメガネ探して日脚伸ぶ

遠会釈あれは何人銀杏踏む

コート着て懐中時計役立たず 埼玉 松岡 水学

空咳の父似となりし師走かな

足元に一年ぶりの行火かな

一枚目なかなか書けぬ賀状かな

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 岩崎可代子 〃

\*選句は全て 品川鈴子

職辞してよりの勤労感謝の日 中村 紘

長い年月を現役で働き続けた頃は、勤労感謝の日が待ち遠しくて、あれこれと計画しても、瞬く間に過ぎる秋の日だ。只のんびりと家庭の温かさに浸り心身の疲れを治すべき休日。

毎日が日曜という立場の今では、健全な老後を謳歌しながらも、妙に職のある世代が輝いて見える。

とび出せば月はや皆既あかぐろく 遠藤とも子

月全体が地球の本影に入り、月面に太陽の光が少しも当たらない現象を皆既月蝕と呼ぶ。滅多に見られぬ瞬間だから、慌てて戸外へ飛びだすと、すでに月面全体が赤黒い不気味な姿で、昔の人々はこの月を怖れたのも頷ける。赤黒さが生々しい異変。

暮の街ここを先途とチンドン屋 吉本 淳

不景気な年末の街に何とか年の市を盛上げようと雇われたチンドン屋、宣伝費を抑えて効果を挙げる知恵に脱帽、だれもが被害を乗り越える歳末こそ商売の瀬戸際、ここが芸の見せ処とばかりに大張りのチンドン屋。時代遅れの騒がしさも、厚化粧に隠して、おかしくも哀しい頑張り様。

首塚の少し傾く冬の雲 高木 篤子

八百年程前、一谷の合戦が行われたことから源平ゆかりの地として須磨寺（神戸市須磨区）には多くの史跡が残っている。坂東武者熊谷直実に首を討たれた平敦盛の首塚もその一つ。長い年月を経て少し傾いた塚に寒々とした冬の雲が垂れ込めている。十五歳で散った敦盛がひとしお哀れに思われる。同時掲出、清盛・福原遷都のお句から、首塚は敦盛のものかと推測させて頂いた。

杜鵑草血の斑濁きてほると落つ 吉井 潤

杜鵑草の名は花の斑点が鳥のホトトギスの胸毛の模様に

似ていることに由来しているとか。紅紫色の斑紋を血の斑と見立て「ほろと落つ」と修辞されたことで「啼いて血を吐くほととぎす」を連想してしまうのは穿ち過ぎだろうか。

猫舌の友集まりておでん鍋

石川 裕美

お仕事仲間、それとも幼子を持ったお母様の集まりか。「寒い時は鍋料理に限るわね」とおでん鍋が用意された。が揃いも揃って猫舌同士。久しぶりに一杯やりながら(?)他愛無い話に興じている内におでんも程良く冷め食べ頃になってきた。湯気の向こうの楽しいな会話が聞こえてくるようだ。

室の花隠れて会ひし喫茶店

上田 雪夫

「隠れて会ひし」とは何とも穏やかならぬ表現。人妻との忍び逢い、はた又家を出た母が実の子に会いに、否、親の許しが得られない恋人たち。様々に膨らんだ妄想を「室の花」というほんわりとやさしい季語が打ち消した。ピンクのシクラメン、もしくは芳しいフリージアの切花か。それほど深刻な事情ではなさそうだ。

返答なきメガネ探して日脚伸び

武田 貞子

眼鏡の置き忘れなど誰にだつて日常茶飯の事柄。問いかけてみても眼鏡が返答する筈もなく、どうしてこんなと見える所から出てくることもしばしば。冬至も過ぎ僅かずつでも日脚が伸びているのを実感出来るようになった。まー気長に探してみることにしよう。「日脚伸び」の季語の選択からゆつたりとしたお暮らしぶりが拝察される。

一枚目なかなか書けぬ賀状かな

松岡 水学

表も裏もパソコンで瞬時に作ってしまう年賀状など、作者には許し難いことかもしれない。年末の慌しさにかまけて延び延びになっていた年賀状書き。やっと暇を見つけて文机に向かう。さて何と書こうか。知己の顔も次々に浮かんできた。おもむろに墨を磨りながら構想を練るとしよう。

四万十の遊覧船にぬくめ酒

中村 吟子

四万十川は高知県南西部を流れ土佐湾に注ぐ四国第二の川。気心の知れたお仲間と、日常の雑事から解放されての旅。清流で知られる美しい水面を眺めながら盃を交わせば、ついお酒もすすむというもの。本来なら遊覧船は夏の季語というべきかもしれない。が「温め酒」がそれらを覆って余りある。